

## はじめに

世の中あまり明るい話題がなく、日本中が元気をなくしているように見えますが、自殺者が急増している中高年の世代に、私もどっぷりと浸かっています。卒業生の皆さんも職場でリストラの嵐が吹きまくっているでしょうが、私立大学はすでに、国立大学も平成16年4月1日実施予定の「法人化」を目前に控え、統廃合が一挙に進むのでしょう。銀行でも持株会社が解禁され、国立大学も結局は旧帝大だけが残るかもしれないように、近年の構造改革には戦前体制への復帰とも思われるものが多く含まれます。

中島みゆきの応援歌つきで、「かつて日本はこんなに元気だった」と毎回言っているような『プロジェクトX』を見てみると、戦後の日本が、松下とかソニーとかのベンチャー・ビジネスの「匠の技」に支えられていたかがわかります。高品質・高付加価値のモノを作ってそれを輸出する、それが日本の繁栄を支えてきた基本でした。さらにそれを支援してきたのは、地道な生産活動や流通に融資してきた地域金融というベンチャー・キャピタルでした。「信用を受けることは基本的人権の一つである」と言うムハマド・ユヌスが設立したバングラデシュのグラミン銀行が、メガ・バンクではないマイクロ・ファイナンスの雛形として、今再び脚光を浴びていることに、目を向けるべきでしょう（竹田茂夫『信用と信頼の経済学』NHKブックス,2001年）。

「貿易」が成長のエンジンであったのはもはや遠い過去のことであり、それに代わって「金融」は成長のエンジンとはなり得ていません。成長率、失業率、インフレ率等のファンダメンタルズは、1970年代以前の固定相場制の時代の方が、それ以降の変動相場制の時代より、はるかに良好だったことは記憶にとどめて良いことがらです（イトウエル＝テイラー著、岩本・伊豆訳『金融グローバル化の危機』岩波書店,2001年）。「リスク管理」が本業のみならず商売になっている経済より、リスク管理を必要としない社会の方がまっとうに思います。かつてモノづくりで高成長を遂げた時代

には、Small is beautiful は反体制でしたが、公害や地球環境破壊が深刻になってから、「持続可能な開発」が体制派になりました。ハイリスク・ハイリターン時代に、ローリスク・ローリターンは傍流ですが、やがて主流の座に復活するかもしれません。

宮崎駿の「千と千尋の神隠し」がベルリン国際映画賞で金熊賞をとったことと、ブッシュ大統領の言う「悪の枢軸」発言とは、見事な好対照をなしています。前者の背景にある日本神道やギリシャ神話のような「多神教」は、善悪や白黒が曖昧としていて、いい神様も、とんでもない神様もいるが、みんな神様で争わない。それに対して後者には、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教のような「一神教」に特徴的な、善悪・白黒をハッキリつけたがる宗教的背景を感じます。だから、アメリカとアラブとイスラエルは戦う。

河合隼雄は「一神教と多神教の対話について」の中で、多神教の構造を「中空構造」(hollow-center structure)と呼び、一神教の構造を「力(原理)中心統合構造」(power or principle-center integrated structure)と名付けました。前者は、多様なものが特に何かを排除することなく調和的に共存できるが、極めて強力なものが進入してきたときに対処する力が弱い。それに対して後者は、誰が中心にはいるかは公平な競争に基づいて決められるが、敗北したものは周辺に押しやられ、中心と周辺の格差が広がると、もはや体制を変えることは難しく、自分に反対する側を抑圧したり排除したりする危険性を持つ。

私たちがグローバリゼーションをアメリカニズムとして嫌悪する感情を持つのは、間違いなく私たちが多神教的な雰囲気の中で生活しているからでしょう。私もまた、「こうでなければならない、それ以外は許さぬ」というファンダメンタリズムを嫌悪する「思想的エコロジスト」だと思っています。だから、同じキリスト教であっても、ギリシャ神話のような多神教的なセンチメントを持っているヨーロッパが、ユーロ導入に当たって、4つのマクロ経済指標の収斂(convergence)を目指しましたが、他方でどれに伴う社会的・地域的格

差を是正する結束(cohesion)も推進してきたことにもっと目を向けるべきだと考えます。

ところで、この1年間で唯一明るい話題と言え、昨年8月に地上8階・地下2階の経済学部の新棟が完成し、われわれの研究室を含め、事務室や演習室等が移転したことでしょう。私の研究室も8階南側に移転したので、窓からの眺めは抜群です。目の前に時計台を見下ろし、その先には平安神宮の鳥居、さらに知恩院の大屋根まで見渡せます。今も京都大学は建築ラッシュで、平成15年度からは、工学部が桂の第3キャンパスへの移転を開始し、北門を入った所にある化学系と土木系の建物に、経済学研究科のビジネス・スクールや法学研究科のロー・スクール等が入る計画になっています。

7期生の皆さん、卒業おめでとう。12人のうち一人だけ自発的留年。今年もまた、院生の柴田君と藤嶋君、それに元ゼミ長の藤中(康)君に、特別の感謝をしたいと思えます。このゼミで同時に二人も財務省に合格したのは、本当に快挙でした。藤嶋と藤中とは長いつきあいだったけれど、卒業後もこのゼミの成長を応援して下さい。酒井さんは、後輩の女子学生の相談相手になってくれたことに感謝します。チョウさんはいつも行方不明、秋山さんとは帰国後あまり接する機会がなかったけれど、舟橋さんに何やらファイナンス・エキスパートらしき感じがしてきたのには驚きました。サムナンとバイラ、それに藤中(智)君は、大学院での成長を期待します。清水君と伊澤君は、3回生から入ってきたのに、積極的に活躍してくれました。米崎君は、来年は卒業しましょう。

OB、OGの人には、既婚者のみならず、早くもお父さん・お母さんになった人までいます。石井君、伊藤(柴田)さん、かわいい赤ちゃんの写真ありがとうございます。また去年は、猪俣君の骨折りで、東京在人会なるものが開かれた由。今年、青竹会がありますので、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。最後になりましたが、寄付金をいただいたことに心から感謝します。この機関誌も

本号から二段組を採用するなど、経費節減に努めました。藤中(康)君が、「OB・OGの人から寄付金をもらっているのだから、みんなその自覚を持って書いてほしい」と何度も言っていました。ご理解の上、今後とも宜しくご協力下さい。

私は昨年、本を2冊出版しました。一冊は『グローバル・エコノミー』(有斐閣)という共著のテキストで、もう一冊は『金融グローバル化の危機：国際金融規制の経済学』(岩波書店)という共訳書です。昨年末に出たばかりの后者に対しては、年末の12月30日の『日経』で、間宮陽介教授が「読書2001年回顧」で直ちに取り上げてくれ、2月3日の『日経』書評欄では、斎藤精一郎教授が、何を思ったかほめ殺ししてくれ、『エコノミスト』2月12日号では、中尾茂夫教授が好意的な書評を書いてくれ、『経済セミナー』3月号では、再度間宮陽介教授が「エコノミストの読書日記」で大きく取り上げてくれました。仕事柄、社会的な評価が私の生命線の一つ(学生からの評価がもう一つの生命線)ですから、少しゴキゲンになりました。詳しくは後ろのページをご覧ください。

今年度はある財団から助成金をいただいたので、それを元手に新しい領域にチャレンジしようと思っています。秋頃には、もう1冊出る予定です。では、9月にお会いしましょう。

2002年3月10日

岩本 武和

追伸

藤嶋君の努力で、ようやく岩本武和研究室HPを立ち上げることができました。しばらくはUnofficial HPで運営しますが、近く大学のサーバーに移管しOfficial HPに移行するつもりです。卒業生・学部生・院生の掲示板も用意してありますので、ご利用、ご協力をお願いします。来年度からは、この機関誌も紙を媒体とするのではなく、webを媒体とするものになるかもしれません。しばらくの間URLは、下記の通りです。

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/3251/>